

Title	'Vision' の内と外 : Wordsworthにおける「孤独」と「社会」
Author(s)	竹中, 靖治
Citation	大阪外国語大学学報. 36 p.77-p.92
Issue Date	1976-03-01
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80584
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

‘Vision’ の内と外

——Wordsworth における「孤独」と「社会」——

竹 中 靖 治

Inside and Outside Vision

——Wordsworth in Solitude and Community——

Seiji TAKENAKA

Wordsworth, it is said, was a poet of *solitude*. In fact he wrote so much by and about it, and this qualification may give rise to the easy assumption, for example, that he preferred being left alone to being in company, or that he was of a contemplative nature. As it happens, this was by and large the case with him. However the truth is, as I shall try to demonstrate it in the following essay, that ‘solitude’ had far more vital bearings upon the growth of the poet’s mind in terms of its imaginative faculty. But then, ‘solitude’ is essentially a condition determined, in both the mental and the physical senses of the word, by its manifold relations to ‘community’. I shall therefore take into consideration some features of the poet’s biographical life, as well as the subtle workings of ‘solitude’ upon the inner processes of the creating mind, in order to disclose it in all the important aspects of its involvement in the poet’s life as a whole. From this point of view, I shall draw mainly on *The Prelude*, his longest poem, for the support of my argument, because, built substantially on a train of those visionary moments in his earlier years which he recalls as representing what is of the greatest significance to his inner self, it provides rich resources of evidence by which to examine the apparently indispensable role played by ‘solitude’ as it acts on the whole spiritual life of the poet; and it is hardly necessary to add that in so doing I shall refer also to other documents including his other works.

イギリス文学史上でのロマン主義の最初の道標と目される *Lyrical Ballads* (1798) で、Wordsworth がその有名な「序文」(*Preface*) において示している革新的なものの中心はいう迄もなく田舎の民衆の生活と言葉の重視である。この宣言はそれ迄の都会的洗練を導ぶ文学精神や

趣味にとっては一大衝撃となったわけであるが、この一見したところの文学的ないし言語的民主主義は実は Wordsworth の内面との関わりにおいては単純に理解し得ない曲折を孕んでいるのである。

Wordsworth はいゆる隠遁者ではなかったが、そうかといって庶民的と称される人柄が普通そなえている話し好きであるとか気さくであるとかという人物でもなかった。貧しい民衆や浮浪者を好んで詩の題材に取り上げたこの詩人は、しかしながら、その出身地でありまた生涯の大部分を送った湖水地方(the Lake District)の民衆と気易くつき合ったということとはできないであろう。晩年を送った Rydal Mount の村で子供達を時々お茶に招待するといった親しみを示すことはあったが、それは上品で情深い紳士として地域の人々に印象付けられていたということ以上のものではない。それは、すぐ北の英・スコットランド国境(Border)の向う側の詩人で Wordsworth 自身も近親感を懐いていた Burns や、*Lyrical Ballads* の共著のパートナーである Coleridge ののらくら息子 Hartley のように土地の人々に身近な存在として愛されていたのとは対照的でさえある。独り散策しながら時折詩句を囁き囁き創作したと記録されまた近所の人にも知られていたという彼のこの習癖は、彼の詩作への没頭振りと共に地域社会からの疎遠ぶりを物語っている。

詩作とは本来的に孤独な作業であるに違いないが、それでも 'ballad' の作者は民話の伝承や自分の作品の受け取り手としての民衆との連がりを持ち得るものである。事実 Wordsworth 自身もこのような 'ballad' 詩人の幸運や地域の住民との友情に憧れていたことを推定させる証拠に欠けてはいない。しかし結局はそうした望みはかなえられなかったし、またその詩人としての一般的人気もこの *Lyrical Ballads* や 9 年後の *Poems in Two Volumes* 出版の際にもそれ程のものとはならず、そのため彼は文学界や文学大衆の愚劣さと見栄っ張り加減の前に自分の方から心を閉し勝ちになることさえもあった。しかしまた、この北辺の Westmoreland の地方人として、大学教育以外は地方の学校で学び育ったこともあって、彼が北部イングランドの地方文化に強い愛着心を持っていたのも事実である。例えば Border の両側の詩人で先に挙げた Burns と Cumberland の地方詩人 Robert Anderson などに対するひいき振りを見てもそれが解る。この事実はさらに Moorman によれば、⁽¹⁾ Oxford 大学から名誉号を授与された時その記念講演者が、貧しい者の風俗や信仰を単に善の光の下にばかりか天国的光の下にもおいた、とその詩の民衆性に触れた程の共感の人々に感じさせていたという側面にも見られるのである。

以上のように Wordsworth の中には一方において人を容易に近付けないような詩に対する孤高な姿勢があるかと思うと、他方では貧しく賤しい民衆に対する暖い思いやりや共感が併存するというパラドックスが看取される。それは例えば *The Waggoner* や *Peter Bell* におけるように、観照的ないしは内省的タイプの人間が自己抑制を知らない素朴な人間に対する心理的反応として必ずしも理解できなくはないであろう。しかしその伝記的側面にも目を向けながら考えてみると、折から進行中のフランス革命での生の体験を経て、いわゆる精神的危機に落ち入り、そこで人間社会からの孤絶の境を彷徨し、やがて妹 Dorothy や友人 Coleridge の励ましなどもあってこの

青春の嵐から脱出しようとしていた Wordsworth にとって、*Lyrical Ballads* 及びその詩論としての *Preface* の持つ意味が単なる創作技巧上の問題を超越しているのは当然である。それを端的に指摘するならば、この危機の状態で一層拍車をかけられたであろう彼生来の極度な自己中心主義 (egotism) から生じた自意識過剰という内面の焦迫を民衆の日常生活への興味を通して外へ解放させた点にあるといえるであろう。

Humble and rustic life was generally chosen, because, in that condition, the essential passions of the heart find a better soil in which they can attain their maturity, are *less under restraint* ... (イタリックは筆者)

田舎の民衆の生活に取材する理由を *Preface* で上のように述べる Wordsworth は、実は同時に自分自身の精神病理の本質とそこからの脱出口を見ていたのであり、さらに彼の注意を惹きつけた素朴な人々に半ば羨望の目をも注いでいたのである。

しかし *Preface* の宣言にみられる民衆の日常生活へのこうした関心は、Wordsworth の詩全体からみるならば、いつ迄も支配的な要素とはなっていないというのが事実なのである。そうしてそのことは上に指摘したような自己中心的な傾向のこの詩人にとっての *Lyrical Ballads* の持つ意味を考えるならば驚くに足らないのである。現にこの *Lyrical Ballad* と同時併行して後に *The Prelude* と呼ばれることになる詩人自身の心の自叙伝の筆が進められつつあったのである。また *Lyrical Ballads* 自体も ‘ballad’ と称しながら、そこには例えば ‘Lucy poems’ と呼ばれる一連の作品のように個人的感情の極めて色濃い詩が少なくないのである。このことは、たとえば Wordsworth が民衆生活の平凡な事物を題材にすると宣言していても、それを見つめる目はあく迄孤独の意識を底に持つ強烈なエゴのものであることを示している。そうしてこの孤独の目は一面においては外部世界を精細貧欲に捉えているかのように見えるが、実は常に自分の内面、詩人のいわゆる ‘the hiding places of man’s power’ に立ち帰り、その働きの過程を執拗に見守るのであり、そこにこの詩人の抜き難い生得の資質として ‘egoistical’ と呼ばれる烙印が消し難く押されているのである。

後に *Lyrical Ballads* に収められる ‘Lucy poems’ は、人間存在の孤独の極限の相ともいうべき「死」と、そうしてその死が自分が愛する者に訪れた時人はどのような精神的影響を受けるかに関心を集中しており、その点にこの詩人の意識の著しい二面性が相互の関連の中に集約的に作品化されているのが見受けられる。

Wordsworth の孤独の意識を精神的観点から明らかにしたものとして Basil Willey の論説程明確なものは少ないであろう。この論説に沿って要約すれば、Dante や Milton はキリスト教という「神話」 (mythology) の基盤に立ってその作品の有効性を保証されているのに対し、Wordsworth が生れ育った18世紀後半にはヨーロッパ、特にイギリスではこの神話としての

キリスト教の衰退が進んでおり、それに油を注ぐようにフランス革命や産業革命という社会変動が打ち続いた。

Wordsworth was the kind of poet who could only have appeared at the end of the eighteenth century, when mythologies were exploded, and a belief in the visible universe as the body of which God was the soul alone remained. In this sense his beliefs can be viewed as data furnished to him by a tradition; in this sense he, as well as Dante, may be said to have employed his sensibility within a framework of received beliefs. But his debt to tradition, unlike Dante's, was a negative one; he owed to it his *deprivation* of mythology, *his aloneness with his universe*.⁽²⁾ (第2のイタリックは筆者)

「神話」がどのようなものであれ、人間がそれに信頼を寄せている限りはわれわれを取巻くこの世界はその信頼によって意味付けされ一つの価値体系を持った秩序ある世界として安住し得る場所であり、また従って人間相互の間の心の交流も成立ち、そこから共同社会としての調和がもたらされる。ヨーロッパの中世とはカトリシズムを根底に持つそのような社会が成熟したものではなかったか。しかしキリスト教の信仰が揺いでいた Wordsworth の精神形成期である18世紀の末葉には最早「神話」による現実世界の秩序付けや価値観の統一が不可能となった結果、詩人たる者は宇宙や世界を語るに当っては何等の宗教的、哲学的仲介なしに、いわば自分個人の裸の目で直接自然と向き合わなければならなかった。そうしてそこから個人的な体験を通してそれを個人的意識のイメージとして世界像を打ち樹てることを迫られたのである。さらに Willey は別の箇所で、

... it was inevitable that when a major poet again appeared he should be 'left alone, seeking the visible world.'

No existing mythology could express the 'real', as the 'real' was now felt to be ... The new poet must therefore either make poetry out of his direct dealings of his mind and heart with the visible universe, or he must fabricate a genuine new mythology of his own (not necessarily rejecting all old material in so doing). Keats and Shelley often follow the second of these methods; Wordsworth typically follows the first.⁽³⁾

'Lucy poems' の世界のような常に死と向い合った底淋しさはこのように裸で宇宙に放り出され自らの足で一人歩きしている人間存在の意識の孤独に源を持つものであろう。⁽⁴⁾ G. Hartman がその *The Unmediated Vision* とその後に続く Wordsworth 論で示したように、このような点においてこの詩人は Dante, Milton は云に及ばず、さらに Dryden や Pope と一線を画すと同時に Yeats, Rilke, Valéry, Proust などの現代詩人や作家にも出発点を指し示したといえるであろう。

Willey が説くように、このような Wordsworth の孤独な魂は可視的な世界 (visible world)

との直接の触れ合いによって自分の世界の創造に向ったのであるが、このようにして捉えた世界の意味付けは、Wordsworth の場合 ‘vision’ を中核として構成されているのことがわかる。この ‘vision’ を中核とした詩的創造の力は Wordsworth の場合にも「想像力」として捉えられこの想像力を「すべての知覚に統一を与える力」とみなすことでは Coleridge⁽⁵⁾ と同じ立場であるが、Wordsworth はそこから進んで、彼がいう ‘the light of sense’ の彼方に ‘unknown modes of being’ を感得し、それを通してこの可視の世界に統一が与えられると考える。こうした働きを持つ想像力が最高に発揮されて捉える意味深い創造世界としての ‘vision’ は、特に *The Prelude* において Wordsworth により ‘spot of time’ と名付けられ⁽⁶⁾、その連鎖がこの長大な心の自叙伝の構成原理をなしているのである。それらの場面で展開される ‘vision’ の世界は Wordsworth が一貫して自己の精神的成長との関わりで如何に重大な体験であるかを語るための中心的役割りを果しているものである。

この ‘spot of time’ は、見方によればこの長篇詩においてばかりか、他の作品にも相当数認められるものであるが、ここでは先ず Wordsworth 自身が直接その名の下に取り上げている二つの出来事を中心に考察を進めよう。

その第一のものは Book XI に現われるもので、国境 (Border) 近くののろし台のある原野で、昔罪人が処刑された跡の残され場所に迷い込んだ時の恐怖の体験であり、第二のものは、Hawkshead のグラマースクールの生徒時代、クリスマス休暇に帰郷しようとして迎えの馬を待つ場面である。この両者に共通的なものとして注目されるのは、Wordsworth 少年とその時の彼の感情体験の舞台となる自然界の物象が共に「孤独」な状態におかれていることである。即ち 6 才の William は道案内役の召使いからいつの間にかはぐれて独りぼっちになるのであり、後者の場面でも、連れ立っている兄から独り離れて孤岩の上から眼前の風景に見入っている。さらに詳しく見ると、その背景としての自然には、前者ではその周囲に草木のない池 (naked pool) や国境警備用ののろし台 (beacon) や頭に水がめをのせその衣服が風に吹きつけられる一人の少女 (a girl who bore a pitcher on her head) が、後者では、一匹の羊や吹き曝された一本のさんざしの木や石垣が見られる。このような特徴ある共通性は ‘spot of time’ に準じるとみなし得る場面にも大かれ少なかれ通じる。例えば湖上でのスケート遊び (Book I) ではやはり仲間から抜け出して崖の孤影を印象深げに眺めたり、除隊兵士との月夜の田舎道での邂逅の場面 (Book IV) では詩人も兵士も最初から一人である。しかしその一層極立った例は London の街頭で盲乞食を目撃する場面 (Book VII) であろう。詩人は街の群衆には人間的興味や親密な理解を拒否されたかのように感じる (lost / Amid the moving pageant) が、乞食でしかも盲目というきびしい孤独に包まれる一人の人間が目に入った瞬間電気にでも打たれたかのように一つの啓示を受けるのである。実際 Bradley が云うように、もし兵士が一人でなければ少年 Wordsworth に ‘visionary power’ を喚起しなかったであろうし、帰郷の馬を待つこの生徒が傍に一匹の羊と一本の吹き曝された樹木以上のものが辺りに存在していたならその時「霧はあのような疑いない鮮やかな形をと

って道をこちらえやって来る」ことはなかったであろう。⁽⁷⁾ このように Wordsworth にあっては、想像力は孤独なものの発見によって喚起されることは明瞭である。孤独な存在は彼の心を通して一個の霊的存在と化してしまうかのような荘重な展望の世界に誘い入れられることである。さらにこれらの場面でもう一つ共通的なのは、少年 William とその意識の対象としての孤独な人物や自然の物象を中心に拓がる世界が、物_{モノ}凄_シさや荒涼感 (dreariness) を帯びており、しかもある靈性の光を放つリアリティを湛えていることであろう。

上に略述した第一、第二の 'spot of time' が Wordsworth の過去からの想起によって 'vision' として意味を持つのは、先に触れたフランスから帰国後の数年を特徴付ける想像力の痙痺硬直と自己分裂的な道徳的荒廃から詩人を解き放つきっかけとなったことにある。即ちこのような精神状態の中で、過去の幼少年期を振り返った時、上の二つの事件を体験したその時期の旺盛な想像力が既に現在の自分が痛切に味わっている精神的荒廃に似た何物かを想像によって 'vision' として知っていたことに思い至ったのである。子供時代に周囲の愛情と美しい自然の懷に抱かれて養われた想像力の故に、フランス革命の恐怖政治で知った人間社会の悪や苦しみの大きさに打ちのめされたがための人間不信が詩人をそれだけ激しい自己分裂的危機に曝したのであったが、これらの 'spot of time' の瞬間味わった恐怖と荒涼の心象をなお 'vision' として捉え得たようなたくましい想像力を持った自己が過去に存在していたとの自己認識は詩人に自分の能力への信頼を取り戻させることになった。即ちこれら二つの事件はそれらが想起されることによって自己にとっての 'renovating virtue' であることを知ったのである。この「力」はそれぞれについて、

And think ye not with radiance more divine
From these remembrances, and from the power
They left behind? So feeling comes in aid
Of feeling, and diversity of strength
Attends us, *if but once we have been strong*.⁽⁸⁾

All these were spectacles and sounds to which
I often would repair, and *thence would drink*,
As at a fountain; ...⁽⁹⁾

(イタリックは筆者)

と語られる。

Wordsworth は実はこの詩行に語られているように「一度」だけではなく「二度」も、いや考え方によれば幾度も「強かった」わけであるが、その強い想像力が作用したのは、第二の 'spot of time' については明かに父の死後孤独感が一段と高まった時点においてであり、むしろ原体験は父の死がなければそのまま消失してしまっていたとも思われるのである。従ってこの事件は厳密には 原体験の段階からこの *The Prelude* での記録の段階までに詩人の内部の激しい孤独を経

るという三段階により成り立ったものといえる。これに対して第一の事件では、その原体験での感情はこれまた死と結びついているが、それが、

It was, in truth,
An *ordinary sight*; but I should need
Colours and words that are unknown to man,
To paint the visionary dreariness
Which, while I looked all round for my lost guide,
Did *at that time* invest the naked pool,
The beacon on the lonely eminence,
The woman and her garments vexed and tossed
By the strong wind.⁽¹⁰⁾

(イタリックは筆者)

と語られていることから、既に原体験において‘vision’が体験され、その後時間的距りをおいて記録の時点に想起されていると推定される。これらの‘spot of time’に準じる多くの他の体験もこの第一の事件と同じ二段階の成立過程を示しているものが殆んどであるが、とりわけこの二つが詩人の危機の時期に意味を持つのは、‘vision’が「死」という孤独の極限状態を契機としていくることと、それがこの時期の強い孤立感の中の Wordsworth によって想起されたことにある。つまり詩人の現在の孤独が過去の孤独の体験を呼び起したのである。この時期の Wordsworth は確かに Coleridge や妹 Dorothy の献身的な友情や励ましに感謝していたに違いないが、詩人にとっての真実の救いは孤独の中に生きる想像力の活動にしかなかったのである。

Here keepest thou *in singleness* thy state:
No other can divide with thee this work:
No secondary hand can intervene
To fashion this ability; 'tis thine,
The prime and vital principle is thine
In the recesses of thy nature, far
From any reach of outward fellowship,
Else is not thine at all.⁽¹¹⁾

(イタリックは筆者)

これらの詩行は明かに Wordsworth にとっての最良の‘community’の部分であるこの二人の存在さえも詩人にとっての「孤独」に比べて二次的なものでしかないことを物語っているが、それと共に、フランス革命に直接関わり、自身の恋愛事件も経験するといった行動的生活が、彼のような本質的に観照的なタイプの詩人から、想像活動の保証としての孤独の場を奪ってしまっていたかを逆説的に証明している。この意味で、D.G. James がこの詩人の精神的危機に関して、

想像力が彼を捨てたのではなく、彼が想像力を捨てたのである、とするのは正しい。⁽¹²⁾

以上述べたところにより、Wordsworth においては、重要な体験としての ‘vision’ が孤独な対象に働きかける想像力を介して、また同時に詩人の孤独な状態の中で喚起されること、及びその意味付けがこれまた孤独の中での想起によってなされることが理解されたことと思う。

ところでこの二つの段階の中で Wordsworth に最も顕著な特徴は、前述したように前者の段階における自己及び意識の対象の双方の側における孤独の状態である。既に一部略述したように、それらの原体験での詩人は初めから一人であるか、途中から一人になるかのどちらかであり、一方 ‘vision’ の世界を構成する自然の対象物も個体としてか、孤立した一群として存在する。しかしこの双方の側の孤独状態の中でのいわば相互作用の成立は、この原体験の段階では實際上詩人の側では殆んど無意識に行われており、その場面が ‘vision’ として特別な意味を帯びるのは後からの想起の段階においてなのである。この点でも特に上の二つの ‘spot of time’ は極立った共通性を示している。このように「想起」も亦孤独の中に発動することに原体験との関連に次いで「孤独」の重要性があるのであり、それは上に引用した Wordsworth の「孤独への讃歌」とも呼ぶべき詩行に彼自身が認めているものでもある。しかし、そもそもこの想起の場として必要な孤独は何も Wordsworth に限ったことはなく、凡そ芸術的創造行為が必然的に要求するものであることは今更いうに及ばない。その意味でまたこの詩人のいわゆる「内に向う目」(inward eye)も創造過程のこの段階における意識の集中を表わすものとして彼の独占物とはいいい難いものである。従って Wordsworth における真の特殊性は、実に原体験の段階においてその ‘vision’ の構成要素が孤独の姿で捉えられなければならないという既に指摘した点にあるのである。それでは、想起によって意味付けられる原体験の段階で、殆んど無意識的にせよ Wordsworth の記憶に自然の中の孤独な存在が印せられたのは何故であろうか。前掲の Willey の指摘にもある通り、Wordsworth が「宇宙に独りぼっちに放置され、可視の世界を探究した」のであれば、その孤独の意識が自己の魂の孤影がそこに投影されているとして外部の具象世界の中から孤独な形象を撰び取っていたのではなかろうかと私は考える。屢々指摘され批判されるこの詩人の自己中心主義 (egotism) はむしろ唯我主義 (solipsism) としてその幼年期には詩人自身が後年 ‘abyss of idealism’ と呼んだ程の強烈な自我へ埋没する傾向を示したが、同時にその感覚的能力も並み外れて豊かであったことはその作品に見られる通りである。ここで先ず *Fenwick Notes* を、次に晩年の詩人自身が人に語ったと伝えられる幼児体験をこの関連に触れるものとして参考にしよう。

I was often unable to think of external things as having external existence and I communed with all that I saw as something not apart from, but inherent, in my own immaterial nature. Many times while going to school have I grasped at a wall or tree to recall myself from this *abyss of idealism* to the reality.

There was a time in my life when I had to push against something that resisted, to be sure that there was anything outside me. I was sure of my own mind; everything else fell away, and vanished into thought.⁽¹³⁾

(イタリックは筆者)

Fenwick Notes の方で詩人が「観念の奈落」と呼んで指摘しているのは現代の心理学では幼児的精神の特徴としての外部意識の欠落として説明される。これは今挙げた Wordsworth の表現からも解るように、主観的には外部を自己の延長として感じるという極立った特徴を持つ。Wordsworth の例は同時に触覚という最も原初的な感覚によって外部の存在を意識する過程を記録しているが、他方彼の旺盛な感覚は次第に全面的に働いて外部をより明確に意識していったに違いない。しかしその場合、自ら ‘abyss’ と表現した激しいもう一つの特徴である唯我的傾向はこの外部意識の発達との関連で詩人の内部にどのような作用をひき起したであろうか。私は、このような場合、詩人がその感覚的対象としての外部世界にある孤独な形象を認めた時彼は殆んど無意識にそこに自己の魂の投影を見ていたのではないかと思う。そうして、それが原体験の段階で殆んど無意識と解せられるところに実は反って詩人の意識の如何に深いところに迄孤独が影を落としていたかが証明されていると考えるのである。孤独な魂が外部世界の孤独な形を借りることにより、いわば対象化された姿で詩人と向い合っているのである。もしそうであるとすれば、ここには Hartman が意識の成長として捉えた自然への意識から自我への意識に至る道筋が示されていることになるのである。⁽¹⁴⁾ 従って、Wordsworth の詩の中の重要な ‘vision’ の世界は常に詩人の孤独の意識の投影であるという独特の意味での象徴性を持つのである。このことからまた、彼は自然をそれ自身のためではなく自己の魂のために描くことが多かったといえるのであるが、逆にそういった自然への依拠なくしては自我の魂に對面してそれを凝視することも不可能であるというパラドックスが、実はこの詩人に極めて強い自然の物象への愛着心を説明していよう。この意味で、孤独の中に生きる彼のいわゆる「内に向う目」は、最も深く働いている瞬間における「外へ向う目」(outward eye) でもあるわけである。

先に見たように、詩人の強烈なエゴへの没入は無気味な暗黒の深みを内面に閉じ込めていたわけであるが、F.W. Bateson や K. Clark が説くようにそこに妹 Dorothy への道ならぬ愛情が渦巻いていたかはとにかく、⁽¹⁵⁾ 詩人がその内面の生の焦迫を外部の形象の中に解き放ってそれを観照の対象となし得たところに彼の一つの自己救済の道があったことは確かであろう。従って、古い処刑場跡に迷い込んだ6才の William 少年も、長椅子に寝そべて湖畔の土手で風に揺ぐ水仙の群を記憶から取り出している成熟した老詩人も自分の孤独が世界から自分を遮っているとは感じていない。むしろ、逆に、二人はそれぞれの場面に記録されているように、特定の人や物と強烈なつながりを感じている。もっとも先にも述べたように、前者の場合その絆が実際にはつきり意識化されるのは後の想起を通してであるが。この問題に関して1798年の秋から翌年にかけての Wordsworth 兄妹のドイツ滞在が思い出されよう。厳寒に閉じ込めた異郷の田舎町 Goslar

にあって、*The Prelude* の Book I と Book II が書かれている。それが詩人の幼少年期という書かれた時点から最も遠い過去の出来事を中心に辿られることになったわけであるが、ここで重要なのは、故国から離れまた直接的にはこの異国の町の共同社会から孤立していたという状況が反って詩人を内面の凝視へ誘ったということである。意識の対象から距たった時その対象が逆に鮮かに浮び上るというこの詩人に極めて特徴的な回想と靈感の形式がここに見られるのである。ここに、自己以外のものと関係を持つためには物理的・心理的に孤独の中にいなければならないという Wordsworth のもう一つのパラドックスが成立する。そうして、このような意識の集中が詩人の全精神力の投入を如何に要求するものであるかは、アルプス越えの淋しい山道に迷った不可解な心理体験を14年後の詩人の想像力が ‘vision’ として意味付けする箇所に見られる。

I was lost in a cloud,
Halted without a struggle to break through;
And now recovering, to my soul I say—
‘I recognize thy glory’: in such strength
Of *usurpation*, in such visitings
Of awful promise, when the light of sense
Goes out in flashes that have shown to us
The invisible world, doth greatness make abode,
There harbours, whether we be young or old.⁽¹⁶⁾ (イタリックは筆者)

この「剝奪」と表現される全精神の対象への投入は Wordsworth においては孤独の状態であって初めて確保されたのである。

このように Wordsworth の創造性はその内部と外部とのこのような特殊な関連の上に成り立っているのであるが、それではその詩の中では「孤独」は常にそういう肯定的な意味で、つまり、何等かの形で外部世界と関連を持ちながらその内面が創造性につながっているとして扱われているか、というと、必ずしもそうではないことに注目しなければならない。それには既に度々言及した詩人の青春の日の危機—その期間はほぼ1793年から1798年の始めにかけてと推定される—との関連でいくつかの作品が問題になる。

The Excursion の Book II に登場する「孤独者」(Solitary) はこの時期の詩人の分身であろう。精神的痙攣状態にあるとして描かれるこの人物は、後に成熟し自分の想像力への信頼を取り戻すことによって危機を脱した Wordsworth のこれまた分身と目され得る徘徊者(Wanderer)に对照させられる。また違った角度から当時の詩人の悲劇の本質を語るものとして *The Borderers* が挙げられよう。社会的不正義の犠牲として描かれる Oswald は、今度は自分が犯罪者となり、その間 Marmaduke は苦しみの末諦観と信仰に至り着く。しかしこれらの人物の中でこの時期の

Wordsworth の内面を最も代表するのは Oswald ではあるまいか。理想主義的情熱を燃やしてフランス革命に身をのめり込まさんばかりであった20才過ぎの青年詩人が自分の目で直接知った‘the world’s opinions and usages’が、彼という一個の人格の中で、想像力の生命や「知的存在を高めるためにその姿を人に印象付けるものの観照」とは両立し得ないことを痛感させられた Wordsworth の苦しみは、Oswald の人間性の歪み、即ち、社会から裏切られた結果道徳的人格の分裂とそれに続く道徳的観念の全面放棄、さらには自分を不当に傷付けた社会に対する一種の知的憎悪ともいうべき反抗姿勢、それによる市民生活上のあらゆる義務や絆からの自由等々によって写し出されていると考えられる。この Oswald を初めとして Solitary や Marmaduke に見られるような道徳的墮落は Wordsworth の詩ではしばしば自我の抑圧や閉塞乃至は人格の分裂や崩壊として描かれているが、それに伴うこれらの人物の置かれた孤独状態は最早や「孤立」と呼ばれるべきであって、それは精神的活動の不毛を物語る否定的状況としてこれらの作品で扱われているのである。無論後で触れるように Wordsworth のフランス革命体験がその意識を成熟させる上で大きな役割りを演じたことは否定できないが、詩人としての創造的能力そのものが生きるのはあく迄彼によって「自分が自分に応しい時に自分のものである穏かな生活 (the calm existence which is mine when I am worthy of myself) と語られる状態即ち「孤独」であり、それはさらに後年一層明確に、

When from our *better selves* we have too long
Been parted by the hurrying world, and droop,
Sick of its business, of its pleasures tired,
How gracious, how benign, is Solitude; ⁽¹⁷⁾

(イタリックは筆者)

と確認される。この ‘hurrying world’ の中心には恐らく詩人が青春の日に送った激動するフランスでの行動的生活もあったと思われるが、それが若さの情熱からではあったとはいえ、そこでは彼は場違いな所に身を置いていたといえよう。因みにこの点に関連してより極端な例として Milton が挙げられよう。即ちこの先輩詩人は清教徒革命で活動した中年期の25年間詩人であることを停止し、後再び全く異なる種類の詩人として蘇生したのである。

上述したように、Oswald を初めとする ‘outcast’ 達は多かれ少かれ社会からの孤立によって精神的拘禁状態にあったが、このことは想像力を人間精神の全体的発動と見なしていた Wordsworth にとって頗る深刻な意味を持つのである。即ち、既に明かなように彼は想像力そのものの営みを孤独な状態に求めていたが、これは要するに特に彼の場合にはその状態において外の世界へのつながりを強烈に意識し得たという意味で、意識の限界を持ちながらも、ともかく ‘community’ への参加が果されたといえるのである。しかし、想像力と ‘community’ との関連については実は彼はもっと積極的な見方をしていたのである。

The Prelude の Book II で、Wordsworth は幼年期の想像力について、Coleridge と同じよ

うに、⁽¹⁸⁾ それに知識の獲得における心の創造性としての能動的 (active) 機能を認めるが、彼の場合想像力がその創造行為において孤立して働くのではなく、子供が全身的な機能によってそれに参加すること、特にその場合子供の母親や直接周囲にいる人間からなる共同社会に対する子供の反応がそれに参与することを強調する点に特色がある。子供が想像力によって創る世界は彼一人の作業によるのではなく、周囲の人間の協力を必要とする。例えば「幼児の力が弱くて手折れない一輪の花を傍の誰かが代って取ってやる」ことによって共同社会の人間が示す事物に対する能動的な感情の動きを子供は知る。このように Wordsworth は想像力の生育過程における共同社会の参加を重視し、創造的能力としての想像力を単独の孤立した心の営みとは考えないのである。他人に対する愛情や信頼が想像力の活動に重要であるというのは全く本当である。世界を知るための最も根元的な機能である想像力——これを Coleridge は ‘primary imagination’ と呼び、Wordsworth は ‘first poetic spirit of our human life’ と呼ぶのであるが——はあらゆる面で周囲の人間と接触する子供の全人間的存在の分け難く本質的な部分である。それ故子供にはその共同社会の愛情ある援助、とりわけその母親や身近な人間の感情や行動が重大であり、それ故にまた想像力が人間の全体的生命力に依存すると同時にその活動の統合的頂点の発現であるというのが Wordsworth の考え方の核心であろう。 *The Prelude* のこの部分で彼が特に強調するのは、想像力が愛情ある心の交流からのみ養われるということであり、また ‘Imagination’ と題した終りに近い部分では、知的愛 (intellectual love) と想像力は別個に (dividually) は存在も活動もできない旨を述べている。

こうした愛情の中に育てられるという想像能力が人間性の中で如何に根元的であるかとい点も Wordsworth の想像力説の中では重要であるが、それは例えばやはり Book II で、「赤児の心はその魂が大地の魂 (earthly soul) との明瞭な血縁 (kindred) を要求する時、母親の目から情熱を吸い上げる」「子供の血管には彼と世界をつなぐ自然の重さと親子の絆 (filial bond) が注入される」と表現されている。今、これとの関連で Oswald を初めとする ‘outcast’ 達がおかれている精神的痲痺状態を考えるならば、それは丁度、自然や人間社会との交わりによって成り立つものとして上のように語られる精神の創造性を失った状態としての孤立を意味することになるであろう。と同時にこれは正に Wordsworth 自身の危機でもあったのは明らかである。

The Prelude の中の二つの ‘spot of time’ の体験想起がきっかけとなり Wordsworth が危機から脱したことについては既に若干触れたが、フランス滞在中の行動的生活がその詩人的能力を一時的に封じ込めるという否定的影響を残したとわいえ、やがてその時期を脱した彼をゴシック趣味の感傷的詩人からも脱皮させるという肯定的役割をも演じたのである。即ち自分の理想や希望とは別の所で流動する人間社会やその流れの中に立ち現われる諸々の悪や苦しみの現実を否応なしに突きつけられ、詩人のそれ迄の唯我的意識はここで極めて激烈な形で外からの揺さ振りに出食わした結果必然的に意識の変質拡大を迫られた筈である。その意味では帰国後数年にわたる苦

しみは全くその代償を得なかったわけではない。このような意識の変化は例えば *Guilt and Sorrow* (1794) に検証されるが、この変化を経た意識に養われた想像力はこれ以後、青春前期のただ美しい自然の形象にだけ働きかけるのではなくて、人間社会の悪や苦しみをもその世界の一部として受け入れ抱擁することに耐える力を持つ迄に変化していたのである。そうしてこのような想像力が創り出す ‘vision’ は依然として外部世界の孤独な存在を中心的な媒介としており、例の二つの ‘spot of time’ の延長線上にありながら、Wordsworth の想像力が到達した一つの窮極的 ‘vision’ ともいうべき世界を現出させているのである。例えば、*Resolution and Independence* の「蛭取り老人」との出会いや *The Prelude* の Book VII におけるロンドン街頭での「盲乞食」を目撃する場面は、既に触れた同じこの長篇の Book IV に描かれた月夜の晩の「除隊兵士」との出会いのバリエーションである。便宣上後の二つの場面を引用すると、先ず「兵士」との場は、

He was alone,
Had no attendant, neither Dog nor Staff
Nor knapsack; in his very dress appeared
A desolation, a simplicity
That seemed akin to solitude. Long time
Did I peruse him with a mingled sense
Of fear and sorrow. From his lips meanwhile
There issued murmuring sounds, as if of pain
Or of uneasy thought; yet still his form
Kept the same steadiness; and at his feet
His shadow lay, and moved not ...

... and when, ere long,
I asked his story, he in reply
Was neither slow nor eager; but, unmoved,
And with a quiet uncomplaining voice,
A stately air of mild indifference,
He told in simple words a soldier's tale ...
There was a strange half-absence, and a tone
Of weakness and indifference, as of one
Remembering the importance of his theme
But feeling it no longer. ⁽¹⁹⁾

と描写され、「盲乞食」との場は、

... 't was my chance
Abruptly to be smitten with the view
Of a blind Beggar, who, with upright face,
Stood, propped against a wall, upon his chest
Wearing a written paper, to explain
The story of the man, and who he was.
My mind did at this spectacle turn round
As with a might of waters, and it seemed
To me that in this label was a type,
Or emblem, of the utmost that we know,
Both of ourselves and of the universe;
And, on the shape of the unmoving man,
His fixèd face and sightless eyes, I looked
As if admonished from another world.⁽²⁰⁾

というふうにこれまた孤独の世界が展開し、そうしてまたこれは「遠く土地から派遣された」ような「蛭取老人」の場合についても同じである。三つの場合とも荒涼とした雰囲気の中に苦しみ
の重荷を負った肉体が不思議な精神性の光中にその肉体性を超えているような孤独者を焦点とし
て ‘vision’ が成り立っている。特に「自分の苦難の物語りの重大さを思い出しながら同時に最早
やそれを感じていない」ようなこの兵士は殆んど完全に「盲乞食」と「蛭取り老人」のイメージと重
なっている。確かにいえるのは、このような ‘vision’ を創り得たこと自体が如何に Wordsworth
の想像力が意識の変化を有効に駆使し得る迄に甦ったかを示しているということであるが、さら
に重大な点は、詩人が痛切に感じていたに違いない人間界の苦しみ
の極限状態がこのような至高
の ‘vision’ の中に昇華解消されていると考えられることであろう。これは近代詩人の独りぼっ
ちの魂がその直接的体験から想像し得た世界の一つの窮極の相貌を示している。そうしてこの
‘vision’ が、Wordsworth に対して何かと批判的言辞の多かった Keats がその短い生涯での現実
体験との相剋の末、想像力の極限において創り出した長詩 *Hyperion* の中で、若い Apollo が苦
悶の中に捉えた ‘vision’ の世界に驚くばかりに酷似しているのは偶然であろうか。

... yet I can read
A wondrous lesson in thy silent face:
Knowledge enormous makes a God of me.
Names, deeds, grey legends, dire events, rebellions,
Majesties, sovran voices, agonies,
Creations and destroyings, all at once

Pour into the wide hollows of my brain,
And defy me, as if some blithe wine
Or bright elixir peerless I had drunk,
And so become immortal.⁽²¹⁾

先の Willey の説明にもあったように神話が崩れた時代のこの二人の詩人の異った別々の孤独な歩みはその想像力の最後の展開において一瞬交わったかに見えないであろうか。

こうした ‘vision’ によつて証されるような想像力を行使し得る Wordsworth の内面の真実は、彼が人間世界に避け難い苦しみを底の底迄知り尽したが故に最早やそれを感じていないということであろう。ここにおいて *Apollo* における Keats のように、三つの ‘vision’ の三人の孤独者に Wordsworth の影が重り合うのである。この観点から、容易に青春への挽歌と見なされ易い *Intimations Ode* (1802?) は意識のこの段階に至り着く成長過程の痛みの記録であり⁽²²⁾、その数年前の *Tintern Abbey Lines* におけるように、自然を介して過去の自己を確かめながら未来を探っている詩人の孤独な姿がそこに見られるのである。「神話」を持たない孤独者は自らの体験の歴史によってしか未来を生きることができないのである。

しかしながら「蛭取り老人」や「盲乞食」の ‘vision’ の地点から Wordsworth 晩年のキリスト教 (Anglican Church) への帰依への道程はもういくらも残されていないと見ることは可能であろうし、また確かに彼を詩人として価値あらしめているのは18世紀後半の精神状況が彼に課した独り旅 (voyaging through strange seas of thought, alone) の軌跡であろう。しかしその孤独な魂が直接自分の手で掴み取った体験を上のような ‘vision’ として語る時、たとえその真実が最終的に伝統的信仰の説くところに具現しているのを発見したと思う満足感が Wordsworth に見られるとしても、体験からの苦悩の実感に裏打ちされた詩人の魂は、彼をむき出しのドグマに歓喜させるには余りにも謙虚になっていたに違いない。

ともあれ、Wordsworth の想像力が捉え得た最高の ‘vision’ の中にこれら三つの場合を数え、それらが *The Prelude* の ‘spot of time’ というこの詩人に最も重要な意味を持つ体験の延長線上にある発展と認められる限りにおいて、Wordsworth の想像力は「神正(義)論」(theodicy) 的な意味において詩人を伝統的信仰に接近させた形で芸術的結実を遂げたのであり、その意味では、彼は個有の立場からこの伝統に精神的 ‘community’ を見出したのであるといえよう。しかしそれにもかかわらず、そこに至り着く迄の孤独な魂の歩みは正しく近代的自我意識の発露に違いなかった。

注

The Prelude は J.C. Maxwell 編の parallel text (Penguin Books 1971 年版) による。1805版と1850版の区別は必要により明記。

- (1) Mary Moorman: *William Wordsworth, a Biography, Later Years, 1803-1850* (Oxford, 1995) pp. 542-3.
- (2) Basil Willey: *The Seventeenth Century Background*, Chap. 12, Wordsworth and the Lock Tradition. (Penguin Books, 1972)
- (3) Ibid.
- (4) この観点に関連して拙稿 On the *Lucy Poems* (大阪外大「英米研究」第9号収録) 参照。
- (5) S.T. Coleridge: *Biographia Literaria*, Chap. XIV.
- (6) *The Prelude*, Book XI, l. 258 (1805), Book XII, l. 208.
- (7) A.C. Bradley: *Oxford Lectures on Poetry*, ext. in *William Wordsworth*, ed. G. McMaster (Penguin Books, 1972)
- (8) *The Prelude*, Book XI, ll. 324-328. (1805)
- (9) Ibid., Book XI, ll. 383-385. (1805)
- (10) Ibid., Book XI, ll. 308-316. (1805)
- (11) Ibid., Book XIV, ll. 211-218 (1850)
- (12) D.G. James: *Poetry and Scepticism*, Visionary Dreaminess, ext. in *William Wordsworth*, ed. G. McMaster (Penguin Books, 1972)
- (13) Quot. *Wordsworth: Poetical Works*, ed. William Knight (1896)
- (14) Geoffrey Hartman: *Wordsworth's Poetry*, The Boy of Winander, ext. *William Wordsworth*, ed. G. McMaster.
- (15) F.W. Bateson: *Wordsworth, A Re-Interpretation*, ext. Ibid.
Kenneth Clack: *Civilization*, II. The worship of Nature (BBC, J. Murray, 1969)
- (16) *The Prelude*, Book VI, ll. 529-536 (1805)
- (17) Ibid., Book IV, ll. 354-358 (1850) 1805年版には相当部分なし。
- (18) op. cit.
- (19) *The Prelude*, Book IV, ll. 415-425, ll. 440-445, ll. 475-478 (1805)
- (20) Ibid., Book VII, ll. 609-623 (1805)
- (21) John Keats: *Hyperion*, Book III, ll. 111-120.
- (22) Lionel Trilling: *The Liberal Imagination*, The Immortality Ode (Penguin Books, 1970) 参照。